

プライバシー境界のゆらぎ—近代ジャーナリズムと *The Reverberator* —

中井 誠一

序

Henry James は極めて韜晦的な作風の作家であり、物語の結末や中心的な問題をあえて明示しないため読者の恣意的な読みを招来するような作品が多いのは周知のことだが、彼が韜晦的作家であるというのはその生涯についてもいえることであり、自らの人生に施した化粧漆喰が人物像の把握をかなり困難にしてきた。James が私事を他人に探られることを嫌い、意図的に事実を秘匿したこともよく知られており、Constance Fenimore Woolson との間で交わされた書簡を互いの了解の元に焼却処分に使っていたことが Leon Edel によって指摘されている (Edel 340)。“The Aspern Papers” (1888) では、有名詩人ジェフリー・アスパンの手紙をあらゆる手段を弄して手に入れようとする雑誌編集者の所行が描かれているが、James 自らの私生活におけるプライバシー侵犯への不安が窺えるモチーフとして興味深い。

もともと James には、ジャーナリズムに対する屈折した思いがあり、“The Figure in the Carpet” の語り手「わたし」のように、自分の小説を理解しない新聞・雑誌の批評家や編集者に対する憤懣を感じていたし、次第に大衆化していく新聞のプライバシー侵害について苦々しい思いを抱いていた。そして、そのような反感は、社会問題を取り上げた中期の作品 *The Bostonians* (1885) に登場する新聞記者 Mathias Pardon の原形となる人物設定においても、その創作ノートに明白に表れている。

There must, indispensably, be a type of newspaper man—the man whose ideal is the energetic reporter. I should like to *bafouer* the vulgarity and hideousness of this—the impudent invasion of privacy—the extinction of all conception of privacy, etc. (*Notebooks* 19)

確かに、Edel も述べているように、James は自らの私生活が後世ジャーナリストによって暴かれるのではないかという不安を抱いていて、その影を帯びたテーマ、あるいは隠れたモチーフが作品に繰り返し現れているのだと推察される。しかし、それは逆に言えば、手段の正当性は置くとして、秘匿された秘密／真実を探り、それを大衆／読者の前に提示し、その成果の如何を問うことが、ジャーナリスト／文学研究者の本質であるということ James が痛切に感じていたということを暗示するものでもある。

こうしたプライバシーとジャーナリズムの問題を真正面から扱った作品に *The Reverberator* (1888) がある。この物語に登場する新聞記者 George Flack も、やはりプライバシーを蹂躪する否定的なジャーナリストとして捉えられてきた。彼は Francina (Francie) を誘導して Probert 家の内実をしゃべらせ、それを自分の新聞で暴露することによって、彼女と Gaston との婚約を解消させようとする卑劣な人物であるという評価が一般的である。

しかし、Flack の発表した新聞記事の内容は明確にされていないが、一旦「真実」を手にした新聞記者という立場に置かれたとき、それを封殺してしまうことはある意味でジャーナリズムの本義に背く行為であることも確かである。また、プライバシーの概念が確立しておらず法的な規制もなかった当時は私的・公的の区分が曖昧で、立場や階級におけるプライバシー境界のゆらぎがあり、この作品にもそれが反映していると思われる。同時に、物語の背景となる時代は、近代資本主義の発展に伴い新聞・雑誌の発行部数が飛躍的に伸び、広告収入と購読者を獲得するために扇情的な記事を掲載するマスメディアの熾烈な競争が始まった頃でもあり、プライバシーの問題はさらになおざりにされる傾向にあった。

この小論では、ジャーナリズムとプライバシーという現代にも通じるテーマの作品 *The Reverberator* において、James は、ジャーナリストとしての Flack のプライバシー侵害をどれほど「境界」を侵す行為として描いているのかを、当時の社会状況を鑑みながら読み直す。

I

The Reverberator は、James の執筆活動の中期に当たる 1888 年に発表された。1880 年代後半というと、野心作のはずであった *The Bostonians* と *The Princess Casamassima* の惨憺たる不評から始まり、*The Tragic Muse* 以後の長編小説執筆中断に至る、ある意味で James 文学の分岐点ともいうべき時期である。またそれは、Marcia Jacobson が *Henry James and the Mass Market* で指摘しているように、James の小説の題材が国際テーマから「大衆市場」テーマへと移行している時期でもある。

この小説の中で登場人物の言動や物語の展開に最も大きな影響を与え、小論のテーマの中心的存在となるべき人物は、新聞記者の George Flack である。Flack はアメリカの新聞 *The Reverberator* 紙の記者で、ヨーロッパの上流階級や有名人の社交記事を取材して、それを本社に送る勤めを果たしている。彼は、大衆が望んでいる（と彼が思う）記事の情報を集めるためにヨーロッパを東奔西走している。このように、いわば特派員を海外に派遣してニュースを送らせ、アメリカ国内に即刻配信できるようになったのは、当時発展した科学技術の一つとして電信が大いに助けになっている。海底ケーブルが 1866 年に大西洋を横断して敷設されて以来、主要な新聞社は「電信デスク」(Telegraph Desk) を設けてニュースや情報を送受信していた。*The Reverberator* 紙がどの程度の規模なのかは明確にされていないが、Flack は Francie との会話の中で、発行部数が 20 万部に達したと喜び勇んで告げている。(61) * James がアメリカの新聞の発行部数にどれほど意識的であったのかは不明だが、1990 年代に全米最大を誇った、ピューリッツァーの *The New York World* 紙の発行部数が 1886 年時点で 25 万部（アメリカ新聞史 107）と言われている。20 万部というのは相当な数字なので、James は、各地に電信デスクを備えた大衆的な大新聞社を想定していたと思われる。

Flack は、アメリカからヨーロッパへ渡る客船の中で Dosson 一家と知り合い、その娘姉妹の妹 Francie に関心を抱き、その後一家との交際を始める。Francie は、後に画家の Waterlow が一目見て “a precious model” (36) と見なすほどの美しい女性であった。Flack は

Francie と結ばれることを密かに望みながら、仕事の合間に Dosson 家の姉妹とその父親の買い物や食事に連れ添って、パリの流儀とでもいった様々な知識を受ける。Dosson 氏は *The American* (1877) の Christopher Newman のように、若い頃にかなりの財産を築き、今は悠々自適の暮らしをしている資産家のアメリカ人で、娘たちの買い物にも自分が食事をするのにも金に糸目はずけない。Agnew が “The Consuming Vision of Henry James” で指摘するように、こうした姉妹の行動には「消費のビジョン」が色濃く反映されている。たとえば物語の冒頭部分で、Francie が、返品しようとする大量のハンカチの一部を見つけ出せないと嘆き、それを聞いた Flack が、ハンカチを百枚単位で買うのか (16) と驚いて尋ねるシーンがあるが、Dosson 家は、少なくとも金銭的には、ヨーロッパの上流社会でも引け目を感じないほど裕福な家庭であることが示されている。

新聞を愛読している Dosson 氏には Flack に対する偏見はなく、むしろその該博な知識と新聞記者であること自体に敬意を抱いていて、娘たちと付き合っていることにも好感を持っている。

Mr. Dosson never doubted that George M. Flack was remarkably bright. He represented the newspaper, and the newspaper for this man of genial assumptions represented—well, all other representations whatever. To know Delia and Francie thus attended by an editor or a correspondent was really to see them dancing in the central glow. (22-23)

Francie も Flack に対して愛情こそ抱かないものの、悪感情を抱いておらず、Dosson 氏と同様に Flack の賢さに敬意を抱いている。家族の中で唯ひとり姉の Delia だけは、Flack が Francie に思いを寄せていることに気がついていて、彼女は、Francie をヨーロッパの上流階級の人と結婚させて、自分もその家柄の一員になりたいという悲願があるので、彼には好意的ではない。Delia の思いは、Gaston Probert について語る、次のような会話の中にはっきり表れている。

When Francie made the point that Mr. Probert was neither a count nor a lord her sister rejoined that she didn't care whether he was or not. To this Francie replied that she herself didn't care, but that Delia ought to for consistency.

“Well, he's a prince compared with Mr. Flack,” Delia declared.

“He hasn't the same ability; not half.”

“He has the ability to have three sisters who are just the sort of people I want you to know.” (56, emphasis added)

「三人の姉妹」とは、すべてヨーロッパ貴族に嫁いだ Gaston の姉たちのことを指しており、Gaston に上流階級の身内がいるということを Delia は “ability” と呼ぶのである。Delia には明らかに、ヨーロッパの上流社会への憧憬があり、妹がパリの社交界に入っていくことで、

自らもその「煌めき」のステージに登りたいという半ば公然の願望があることが物語の端々に見られる。

ただ、このような Delia の思考傾向が、実はメディアによって助長されたものであることを narrator は暗示している。

“[A] formidable force seemed to lurk in the great contention that the star of matrimony for the American girl was now shining in the east—in England and France and Italy. They had only to look round anywhere to see it: what did they hear of every day in the week but of the engagement of somebody no better than they to some count or some lord?” (55)

結局、アメリカの新聞・雑誌が書きたてるヨーロッパの社交記事やゴシップが、ヨーロッパの貴族社会への憧れと幻想に拍車をかけ、Delia はまさにそれに感化されていると思われるので、自分たちのメディアを通じて及ぼした影響のために Flack 自身が排除の対象になるというアイロニカルな結果を生み出しているのである。

Flack は、Francie の肖像画を描いてもらうことを提案し、当時次第に流行し始めていた印象派に属するアメリカ人画家のアトリエに連れて行くのだが、そこで皮肉にも、将来の彼女の婚約者となる Gaston Probert に出会わせてしまう。Francie を見染めた Gaston は、それ以降頻繁に Dosson 家に入出入りするようになり、明らかに Francie が目的とみられる一家との付き合いを、Flack は苦々しい思いで傍観する破目になる。一方、Gaston にとって Flack はまったく眼中になく、「新聞屋がこんな美しい人を手に入れるなんて考えられない」(88) と蔑みをあらわにしている。

しかし、ここで留意しておきたいのは、Francie が Flack に Probert 家やその親戚のゴシップを喋り、それが新聞に掲載された事件以前の Flack に対する印象は、Dosson 家の概して好意的な評価を除いても、全般的にさほど否定的ではないことである。確かに、アメリカの新聞記者としての Flack を、当初 narrator は好意的には描いていない。

He [Flack] was not a specific person, but had beyond even Delia Dosson, in whom we have facially noted it, the quality of the sample or advertisement, the air of representing a “line of goods” for which there is a steady popular demand. ... As every copy of the newspaper answers to its name, Miss Dosson’s visitor would have been quite adequately marked as “young commercial American.” (14)

James はここで、安く画一的な製品に対する大衆の需要を満たす大量生産メーカーのように、大衆が知りたいと欲する記事を書くジャーナリストを、新聞記事という商品を大量に販売する「アメリカ商人」として印象付けようとしているように見える。こうした描写は、先に述べた James のジャーナリズムに対する批判を鑑みれば当然のようだが、それにしては Flack の新聞記者の属性としての画一性を抽出しただけの、ある意味でかなり抑制され

た表現に思える。たとえば、*The Bostonians* に登場する新聞記者 Mathias Pardon についての、もっと直接的な批判的描写と比較してみると、その違いが浮き彫りになる。

All things, with him, referred themselves to print, and print meant simply infinite reporting, a promptitude of announcement, abusive when necessary, or even when not, about his fellow-citizens. He poured contumely on their private life, on their personal appearance, with the best conscience in the world. (*Bostonians* 117)

ここには、必要があるなしに「市民」の私生活を“abusive”に暴く厚顔無恥な様子が、Pardon における新聞記者の属性として描かれている。しかし、Flack については、暴露事件の後でさえも、少なくとも narrator が積極的に批判する描写は見られない。Flack の性格描写を詳細に見てみると、むしろ肯定的に描かれているのではないかと思える部分も多いことに気がつく。たとえば、彼が Francie に、ジャーナリズムの未来や自分の抱負を情熱的に語る場面が第4章にある。(61-64) それは、James のジャーナリズム批判を規定軸にして読めば、メディアの一層の進展による更なるプライバシー侵害の可能性を示唆するものと捉えられがちであるが、自らの将来に大きな展望を持って進もうとする「アメリカ的な」青年の気概を表現していると読むことも可能なのである。

もちろん、Flack はこの場面で、自分と新聞の将来を語りながら間接的に Francie に求愛をしていて、彼女の愛情の「協力」を求めているのだが、Francie はその「協力」という言葉を直接的に、新聞を所有して発展させようとしている彼への「投資」のことだと思いをし、自分の父、つまり Dosson 氏に相談するように勧める。

“Lord, you’re too sweet!” George Flack cried with an illuminated stare. “Do you suppose I’d ever touch a cent of your father’s money?” —a speech not rankly hypocritical, inasmuch as the young man, who made his own discriminations, had never been guilty, and proposed to himself never to be, of the indelicacy of tugging at his potential father-in-law’s purse-strings with his own hand. (65-66)

将来の父親になるかも知れない人の財布のひもを引っ張るようなまねをするなど思いもよらなかった、というこの narrator の描写は、金銭に対する Flack のまっとうな感覚を示している。金はジャーナリストという仕事を通じて稼いでいくもので、人の財産を当てにするものではないという、まさに、アメリカ民主主義的な価値観が示されていると同時に、後に明らかにされる Gaston の、親族の遺産などで暮らしているヨーロッパ貴族社会的な価値観と対比されるものでもある。

Flack が新聞記事を売る「アメリカ商人」であるとしても、彼のジャーナリズムへの思いは真摯なものだと言える。それはニュース素材に対する彼の姿勢にも表れている。

“Oh I’m very careful about what I put in the paper. I want everything, as I told you; don’t you remember the sketch I gave you of my ideals? But I want it in the right way and of the right brand. If I can’t get it in the shape I like it I don’t want it at all; first-rate first-hand information, straight from the tap, is what I’m after. I don’t want to hear what some one or other thinks that some one or other was told that some one or other believed or said; and above all I don’t want to print it. There’s plenty of that flowing in, and the bet part of the job’s to keep it out” (123)

色々なニュースが欲しいけれど、第一級のニュースソースであるべきで、二次三次的な噂話のようなものは排除する、という Flack の姿勢は、当時のメディア事情から言えば、いや現代のメディア事情からしても、極めてまっとうなものであり、むしろジャーナリストの鑑のようにも受け取れる。これは Flack の建前なのだろうか。

II

ここで、Flack のこうした姿勢に客観的な位置づけをするために、彼のような新聞記者が活躍した、当時の実際のジャーナリズムの状況を見ておくのは無駄ではないだろう。アメリカでは、独立直後に多くの新聞が発行されたが、時代を反映して政治的ジャーナリズムの趨勢が強くなり、ほとんどの新聞が政党によるものか、政党のために存在した The Age of Party Papers の時期が続く。政治ジャーナリズムと言え、ジャーナリズムの本道のように聞こえがよいが、もっぱら党派間の対立に使われていたので偏向や誹謗中傷が極めて多く、一方でこの時期は The Dark Age of American Journalism と呼ばれることもあった。19世紀に入ると、党派争いの紙面から次第に直接的に大衆と結び付く現在の新聞の原形が生まれる。そこで革命的な役割を果たしたのが、1833年に発行された Benjamin Day の The New York Sun 紙である。いわゆる The Penny Papers の出現である。Day は大衆受けをする新聞を作るため、型版を小さくし、価格を相場の6分の1である1セントにして「魅力的な」紙面づくりに努めた。

その内容はこれまでの新聞とはまったく行き方を異にした。まず政治問題は完全に無視し、犯罪など警察種を主に、裁判所記事、市井のゴシップ、人間関係の読み物、火災の記事まで入れ、通俗的に面白く、一般大衆に受けるニュースで埋めた。(アメリカ新聞史 80)

Mass Consumption は大量消費だが、本当の意味で大量に消費するためには、「大衆消費」でなければならない。その意味では、価格を下げることで大衆に購買意欲をもたせ、紙面を通俗的にすることによって人々の興味を引き付けるペニー・ペーパーは着実に大衆消費の道を開いていった。その後も James Gordon Bennett の The New York Herald 紙が、さらに経済ニュースや、劇場・スポーツなどの娯楽ニュースを載せて同じ路線を進み、新聞は次第にその通俗性の度を深めていく。そして、1883年ジョセフ・ピュリッツァーが、前出

の The New York World 紙を買収し、商業主義と扇情主義に焦点を当て、発行部数を飛躍的に増やしていく。それはやがて 1890 年代の、ウィリアム・ランドルフ・ハーストとの購読者獲得合戦、アメリカ新聞史上悪名高い Yellow Journalism の時代へと続いていく。

まさにジャーナリズム扇情主義の高まりの中で、小説 *The Reverberator* が世に問われたわけである。こうした実際状況からみると、Flack のジャーナリストとしての性格はかなり抑制されて描かれているといえよう。しかし、問題は Flack が Francie を誘導して Probert 一族の醜聞を喋らせて、それを *The Reverberator* 紙に掲載したということなので、結局 Flack は当時の扇情主義に倣っているに過ぎないのだろうか。それに答えるにはこの顛末をもう一度詳細に検討する必要がある。

始まりは、求愛を拒絶された Flack が、Francie の肖像画を確認するために Waterlow のアトリエを訪れるところから始まる。彼は、絵を確認せずに新聞に書くことはできないというもっともな口実を使って Francie を連れ出す。ふたりしてアトリエを出たあと、Flack は彼女をブローニュの森に誘い、散歩をしながら会話を交わし、次第に Gaston の姉たち一族の情報を聞きだしていくのである。しかし、ここで注意しなければならないのは、Flack は最初から彼らの「醜聞」を求めていたのかということである。彼は社交記事の記者なので、アメリカの読者が知りたがるようなヨーロッパの上流社会の動向を取材するのは当然のことである。しかも、少なくとも物語の中では、それまでに彼が公にした記事の題材に扇情主義的なものは見られない。現に今彼が取材している内容と言え、台頭している印象派の画家 Waterlow のことや Dosson 家のこと、Francie が絵のモデルになったこと、そしてその絵の出来上がりについてなど、極めて穏当なものばかりなのである。もちろん、この会話の中で Francie が無邪気に喋った内容が、彼にとって言わば「スクープ」であったことは確かだろうが、彼が最初から扇情的な醜聞を引き出すために Francie を誘導したとみるのは結果論的な誤謬のように思われる。

その後、Gaston がアメリカにいる間にその記事は *The Reverberator* 紙に掲載される。Gaston の父 Probert 氏も含めて、その娘姉妹一族皆が Francie の行為と Flack の破廉恥な記事に憤慨し、彼女を直接呼び出して非難を浴びせるのだが、後に不安に震えながら当の暴露記事を目にした Dosson 一家は拍子抜けしてしまう。

It is a remarkable fact that as a family they were rather disappointed in this composition, in which their curiosity found less to repay it than it had expected, their resentment against Mr. Flack less to stimulate it, their fluttering effort to take the point of view of the Proberts less to sustain it, and their acceptance of the promulgation of Francie's innocent remarks as a natural incident of the life of the day less to make them reconsider it. (164)

Dosson 一家にはその記事の中に問題とすべきものを何も見いだせないのである。Delia などは、むしろこの記事の発表のおかげで自分たちがヨーロッパで上流階級と付き合いをしていることを、アメリカの人々を知ることに満足感すら覚えている。(175) Francie にも、

Probert 一族があれほど憤慨する理由が分からないのだが、ただ自分が以前から予想していたように、彼らの気に入らないことをしてしまったという自責の念だけがある。

Flack の書いた記事の内容は明らかにされていないが、もしそれが Dosson 家の人々が感じたように、実際にはひどい誹謗中傷の記事ではないとしたら、また、あの Mathias Pardon のように “abusive” に内実を暴くような内容ではないとしたら、掲載することは社交新聞記者として至極当然といえるであろう。もちろん、それが市民のプライバシーを著しく侵害するものであるとすれば、当然批判は受けるべきだろうが、先述のように、当時のメディア事情では、扇情主義の中でプライバシーは曖昧になりがちであった。しかも、当時はプライバシー侵害に対する法的な処分がないだけでなく、プライバシーの概念自体が明確ではなかった。

ハーバード大学出身の二人の法律家 Samuel Dennis Warren Jr. と Louis Dembitz Brandeis が論文 “The Right to Privacy” を発表して、初めてプライバシーに関する法的規制の必要性を指摘したのが、1890年のことである。そこでは、プライバシーに対するコモンローの権利を “right to be left alone” と定義している。その理由として、テクノロジーの発達によって侵害が容易になったことと、新聞報道の行きすぎがアメリカ社会の基盤を脅かしていることを挙げて、法の整備を主張している。しかし、後にプライバシー理論の先駆けとして重要視されることになる彼らの先進的な論文は当時の言論界で特に注目を引くこともなく、結局二人が生きているうちにプライバシーの法制化を見ることなかったのである。(Lane 61-63)

確かに Flack の書いた問題の記事の一部に “scandalous” (164) な部分はあったとしても、全体的には Probert 一族がなぜそれほど憤慨するのか理由が分からないことについて Francie は、もしかしたらアメリカ人である自分たちがそうした記事に鈍感になっているのではないかという疑いを持つ。

[S]he thought of the lively and chatty letters they had always seen in the papers and wondered if they *all* meant a violation of sanctities, a convulsion of homes, a burning of smitten faces, a rupture of girls' engagements. It was present to her as an agreeable negative, I must add, that her father and sister took no strenuous view of her responsibility or of their own.... (166)

つまり、アメリカの新聞は余りに酷い扇情的主義に侵されているので、彼らはそれに慣れてしまって、その記事の真の問題に気がつかないのかも知れないと、Francie は真摯に自らに問うてみるのである。それにしても納得のいかない彼女は、後に Gaston とこのような会話を交わしている。

She [Francie] flushed at this characterization [that filthy rubbish] of Mr. Flack's epistle, but returned as with more gravity: "I'm very sorry—very sorry indeed. But evidently I'm not delicate."

He looked at her, helpless and bitter. “It’s not the newspapers in your country that would have made you so. Lord, they’re too incredible! And the ladies have them on their tables.”

“You told me we couldn’t here—that the Paris ones are too bad,” said Francie.

“Bad they are, God knows; but they’ve never published anything like that—poured forth such a flood of impudence on decent quiet people who only want to be left alone.” (197)

「パリの新聞はそんなものは掲載しない」と Gaston は抗弁しているが、それは本当だろうか。読者は彼の発言から、フランスの新聞にはアメリカの新聞のような扇情主義がないという印象を受けるかもしれないが、事実は違う。たとえば、フランスの歴史学者ルイ・シュヴァリエの『三面記事の栄光と悲惨：近代フランスの犯罪・文学・ジャーナリズム』によると、当時のフランスの有力紙『フィガロ』は「スキャンダルを好み、個人攻撃に勤しんだ」と描かれている。また、1875年『ビアン・ピュブリック』紙は『フィガロ』紙のことを「汚れたジャーナリズム」と呼んで、次のような批判をしていることを記している。

その新聞〔フィガロ〕はもう十分に我々を傷つけた。喜劇に登場する下僕たちの悪癖をジャーナリズムに持ち込んだのだ。その新聞のせいで、邪な業に習熟すること、すなわち盗み聞きし、手紙をくすね、私生活の秘密を知るために鍵をこじ開け、生業として不謹慎なことを書き破廉恥なでっち上げをする技術に長けることが、知識や才能や気骨にとって代わってジャーナリズムの大きな強みになるのだと思い込む者たちが出てきたのだ…。かくして新聞からは良心も主張も信条も失われ、それは猥談や意地の悪い噂や馬鹿げた中傷の寄せ集めでしかなくなってしまう。(シュヴァリエ 45)

Benjamin Day の The New York Sun 紙の登場とほぼ同時期の 1836 年に、「新聞界のナポレオン」と呼ばれた新聞王エミール・ド・ジラルダンが、フランスのペニー・ペーパーともいべき『プレス』紙を創刊して以来、フランスでも新聞の大衆化が急速に進み、購読者獲得競争が激化し、数多くの扇情的な内容の新聞を生みだしている。『フィガロ』紙は 19 世紀後半にはその代表格だったのである。結局、当時のフランスでもメディアによるプライバシーの蹂躪や扇情的な報道状況は変わらなかった訳である。James がこの事情を知らなかったはずはない。実は、それを暗示するかのような象徴的な場面が小説の冒頭部に描かれている。Dosson 一家が滞在しているリュニヴェール・エ・ド・シェルテンナム・ホテルを訪れた Flack を、Dosson 氏がホテルの読書室に案内するのだが、そこには「彼〔Dosson 氏〕には読めないフィガロ紙と、彼がすでに読んでしまった The New York Herald 紙」(4) が置いてある。つまり、Dosson 氏を代表するアメリカ人（あるいは読者）は The New York Herald の扇情主義は読んで知っているけれども、『フィガロ』紙に関してはその内容は読めない／知らないのである。

もちろん私はここで、Flack の全面的な免罪をしようとしているわけではない。彼の最も良心的な選択としては、中傷に値することは一切記事にしないということもできたのだか

ら。それが本社に採用されるかどうかは別として。また、この作品をジャーナリズムのパブリシティに対する「批判の書」と見なしていないと言うわけでもない。しかし、ここで問題としたいのは、ジャーナリズムとプライバシー／パブリシティの関係がこの作品の中心的なテーマとされていながら、「加害者」である Flack のジャーナリストとしての姿勢は、それを批判的とするには余りに「ゆらぎ」が大きすぎることである。そのためにパブリシティ批判自体が幾分相対化されている。ここには明らかにプライバシー境界のゆらぎが関わっている。そしてそれにはまた、階級の問題も大きく関わっているのである。

III

プライバシーは市民にとっては保護されるものではあるけれども、ある種の人々にとっては積極的に開示するものでもある。プライバシー保護がかなり整備されている現代であっても、その公人としての性格上、政治家には一部プライバシーが認められないこともあるし、芸能人などはむしろ自らプライバシーを開陳することで人気を高めることすらある。そして、まさに当時のヨーロッパ社交界は、現代の政界および芸能界に相当するものと見なせるかもしれない。実際、Probert 一族にとって、この暴露記事はそれほどダメージを与えるものだったのだろうか。その記事について Francie と最後の会話を交わす時に、Flack はこう抗弁する。

Well now, if you want to know, it's a bigger pose than ever, and, as I said just now, it's too damned cheap. It's *thin*—that's what it is; and if it were genuine it wouldn't count. They pretend to be shocked because it looks exclusive, but in point of fact they like it first-rate. (181)

Flack は、彼らの怒りは「気取り」であり、実際は気に入っているのだと言う。それが本当ならば、なぜ彼らは Francie にそれほど憤懣をぶつけたのだろうか。Flack は少し後にその理由をこう述べる。

They [the Proberts] know what's in the papers every day of their lives and they know how it got there. ... They're just grabbing a pretext to break because—because, well, they don't think you're blue blood. (182-83)

つまり、Francie が貴族の出身ではないから、Probert 一族は、彼女を Gaston から追い払うよい口実を見つけたというのである。これは自分の記事に対する自己弁護としてはひどく突拍子もないものに思えるかもしれないが、実はかなり説得力がある。先ほどから私は、Probert 一族という言い方をしているが、実はその構成には厳密にするべき区分がある。つまり、父親の Probert 氏および末っ子の Gaston の二人と Gaston の姉たち三人は別の基準で見なければならぬのである。姉妹三人は貴族に嫁いでいる (morganatic marriage 貴賤

相婚)ので、貴族階級の一員として認められるが、ProbertとGastonは平民としてしか見られない。それでも父親には莫大な財産があるようだが、Gastonは今のところ頼るべき資産もない。彼らは、姉妹の肉親であり財産家であるということで何とか上流階級の末端にぶら下がっているにすぎないと考えられる。

第3章で、Probert氏のことを取材しようとして、Flackがバリのあちこちを尋ね歩いても、誰も彼らを知らないという結果に終わるエピソードがあげられているが、「余りに奥に進んでしまって、どこに入り込んだかわからない家族」(“one of those families that have worked down so far you can't find where they went in”)という皮肉めいた表現は、彼らが上流階級の末端にしかないことを暗示している。そうした自らの境遇をGaston自らが姉のSusan (de Brecourt夫人)に嘆く場面がある。

“[I'm] Always [difficult] at any rate to find a wife for. I'm neither fish nor flesh. I've no country, no career, no future; I offer nothing; I bring nothing. What position under the sun do I confer? There's a fatuity in our talking as if we could make grand terms. You and the others are well enough: *qui prend mari prend pays*, and you've names about which husbands take a great stand. (80)

姉の三人は貴族と結婚し、自分の地位を安定させているけれども、自分は「海のものとも山のものともつかない」と訴えるGastonは実に率直である。Gastonの言う、フランスの格言「夫を手にいれたものは国を手に入れる」とは、まさに、フランスの貴族社会に「結婚」によって手際よく滑り込んだ中産階級の女性の状況を比喩的に示している。Gastonにとっては、こうした状況を打開して、フランス社会で姉たちと同じような生活続けるには、貴族の娘と結婚するのが最善の策といえるのである。金持ちの娘とはいえアメリカ人女性と結婚するのは、半分アメリカ人である彼がさらにアメリカ人に戻っていくこと、つまりは古いフランスの貴族社会からさらに乖離してしまうことを意味する。だからこそ、GastonはFrancieを自分の家族に紹介するのに非常に慎重だし、面通しの後も結婚の準備がなかなか進まないのである。

こうした視点から見直すと、先ほどのFlackの抗弁が実質性を帯びてくる。結局、Probert一家、特に三人の姉妹とその夫たちにとっては、自分たちのプライバシーが新聞に暴かれたことよりも、Flackと二人きりでブローニュの森を散歩するような破廉恥な「アメリカ人」女性を一族に迎え入れないことの方が重要なのだといえる。それには、この出来事に便乗して、記事に憤慨しているふりをする必要がある。現に、Flackを殺すとまで公言したという二女の夫Maxime de Clichéも、姉婿のAlphones de Brécourtも、Gastonがアメリカから帰ってくる段階では、もうFlackのことは放っておくのが最善だと、不可解なほどトーンダウンしている。こうした背景を改めて認識したGastonは、友人の画家Waterlowとの会話の中で“They [the Proberts] never believed in her [Francie] from the first. My father was perfectly definite about it. At heart they never accepted her...(204)”と認めてい

るのである。

結び

この作品におけるプライバシーの境界は、当時のプライバシー概念の不確定さからだけでなく、それが対象となる地位や人物によってもゆらぎが生じているのだが、このように、ジャーナリズムの現場で「商品」である記事を書き、自らの稼ぎで生計を立て、新聞の将来への展望を大胆に語る Flack に対して、立場は違うとはいえ、James がある意味で共感を示しているために、さらにそのゆらぎの幅が広がっているように思える。創作ノートで James は、この小説の舞台となるべき場所を決める過程を描いているが、パリを選ぶ理由として、フランス語混じりで“an old *claque*muré Legitimist circle”(古く閉鎖的な正統主義社会)があることを挙げている。当時ヨーロッパの中でも特に古く因習的な貴族社会を抱いていたフランスを舞台に選んだのは、フランスに扇情主義的なジャーナリズムがなかったからというよりはむしろ、そうした社会の中に Flack のようなアメリカ人の新聞記者が置かれていた状況を浮き彫りにするためだと考えられるだろう。アメリカという民主主義の地ではなく、ヨーロッパの階級社会においてジャーナリストが被る苦境と差別に対する一種の共感を、同じくヨーロッパの因習的な社会で活動するアメリカ人文筆家 James が、Flack の中に見出したとしても不思議ではないのである。

* *The Reverberator* からの引用はすべて *The New York Edition* によっており、以後かっこ内に引用ページを記す。

参考文献

- Agnew, Jean-Christophe. “The Consuming Vision of Henry James.” *The Culture of Consumption: Critical Essays in American History 1880-1980*. Ed. by Richard Wightman Fox and T. J. Jackson Lears. New York: Pantheon Books, 1983.
- Antsyferova, Olga. “Three Interviews of Henry James: Mastering the Language of Publicity.” *HJR*, 22 (2001): 81-92.
- Burns, Allan. “Henry James’s Journalists as Synecdoche for the American Scene.” *HJR*, 16 (1997): 1-17.
- Campbell, W. Joseph. *Yellow Journalism: Puncturing the Myths, Defining the Legacies*. Praeger Publishers, 2001.
- Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, Publishers, 1985.
- Gordon, Lyndall. *A Private Life of Henry James: Two Women and His Art*. New York: W. W. Norton & Company, 1999.
- Jacobson, Marcia. *Henry James and the Mass Market*. The University of Alabama Press, 1983.
- James, Henry. *The Bostonians, in The World’s Classics*, Oxford University Press, 1984.
- *The Complete Notebooks of Henry James*. Edited by Leon Edel and Lyall H. Powers. New

- York: Oxford University Press, 1987.
- *Letters, vol. 3: 1883-1895*. Edited by Leon Edel. The Belknap Press, 1980.
- *The Reverberator*, Vol. 13 of *The New York Edition of Henry James*. New York: Augustus M. Kelly, Publishers, 1971.
- Lane, S. Frederick. *American Privacy: The 400-Year History of Our Most Contested Right*. Boston: Beacon Press, 2009.
- Reid, Michael. "The Repressing of the Journalistic in *The Wings of the Dove*." *HJR*, 19 (1998): 239-45.
- Rubery, Matthew. "Wishing to Be Interviewed in Henry James's *The Reverberator*" *HJR*, 28 (2007): 57-72.
- Salmon, Richard. *Henry James and the Culture of Publicity*. Cambridge UP, 1997.
- Tanner, Tony. *Henry James: he Writer and His Work*. The University of Massachusetts Press, 1985.
- Todorov, Tzvetan. *The Poetics of Prose*. Translated by Richard Howard. Oxford: Basil Blackwell, 1977.
- Zorzi, Rosella Mamoli. "Private and Public Subjects in the Correspondence between Henry James and Isabella Stewart Gardner." *HJR*, 31 (2010): 232-38.
- ウィキリー, ジェニファー・A 『広告する小説』 富島美子訳, 国書刊行会, 1996.
- クロス, ナイジェル 『大英帝国の三文作家たち』 松村昌家・内田憲男訳, 研究者出版, 1992.
- シュヴァリエ, ルイ 『三面記事の栄光と悲惨: 近代フランスの犯罪・文学・ジャーナリズム』 小倉孝誠・岑村傑, 白水社, 2005.
- バルザック 『ジャーナリズム博物誌』 鹿島茂訳, 新評論, 1986.
- ミルトン, ジョイス 『イエロー・キッズアメリカ大衆新聞の夜明け』 仙名紀訳, 文芸春秋, 1992.
- 鹿島茂 『新聞王伝説パリと世界を征服した男ジラルダン』 筑摩書房, 1991.
- 山田登世子 『メディア都市パリ』 青土社, 1991.
- 藤野早苗 『ヘンリー・ジェイムズのアメリカ』 彩流社, 2004.
- 別府恵子, 里美繁美編著 『ヘンリー・ジェイムズと華麗な仲間たち—ジェイムズの創作世界—』 英宝社, 2004.
- 浜田淳一・田島泰彦・桂敬一編 『新訂新聞学』 日本評論社, 2009.
- 村上直之 『近代ジャーナリズムの誕生 イギリス犯罪報道の社会史から』 現代人文社, 2010.